

第1回 GHC サマースクールが東京大学にて開催されました。6日間の日程で行われたスクールの様子について、日本側参加学生より報告が届きましたのでお届けします。

【1日目】2015年9月7日（月）、GHC 第1回サマースクールの初日となる研究会が開催された。羽田教授による開会の挨拶では、グローバルヒストリーにおける時間、空間、主体のスケールの扱い方について、サマースクールの議論の中心になることが説明された（参加大学院学生は、事前に自分の研究とこれらのテーマについて論文を提出することが求められた）。参加者の自己紹介に続き、2つのセッションが設けられた。セッション1（Colonial and Decolonial）はコンラッド教授が、セッション2（Shared Knowledge and Science）はエーデルマン教授がそれぞれ司会を務め、5人の大学院学生の論文が検討された。それらは以下の通りである。

セッション1（Colonial and Decolonial）

Fabian Krautwald (Berlin) : Colonialism, Revolution, and the Scaling of History - The German Colonial Society 1918-1919

Nakao Saki (EHESS) : Defining “Africa” : the Pan-African Struggles of the Young Elites during the Decolonisation in West Africa (1945:1962)

セッション2（Shared Knowledge and Science）

Emily Kern (Princeton) : Evolution’ s Footprints: Transnational Science, Human Identity and the Emergence of Global Research Networks in Twentieth Century Biology

Emoto Hiroshi (Tokyo) : The Reception History of John Ruskin: Towards a Global History of Modern Architectural Thought

Fukuhara Kotaro (Tokyo) : Factors of the Development of Rice Farming in High Latitudes: Example of Northeastern Region of China

植民と脱植民をテーマにしたセッション1では、まずクラウトヴァルト氏の論文について議論が行われた。クラウトヴァルト氏は11月革命の最中とその後のドイツ植民協会の動向について説明し、協会のメンバー構成や組織内の議論を分析した。討論では、ウィルソンの提唱した民族自決の考えの世界的な広まりをグローバルヒストリーと考えてよいのかという点について議論が交わされた。

続いて、中尾氏は1945～1962年の西アフリカにおける脱植民地化に注目し、アフリカという概念とその政治的影響について考察した。フロアからは、パン・アフリカ運動を率いたエリートや学生がどのよ

うな人々だったのか、汎アラブ主義、ヨーロッパなど、他の地域概念とアフリカの関係についての質問などが寄せられた。

両者の研究は共に、協会のメンバー、エリート、学生などによって提唱された思想が、世界的な脱植民地化の流れと関わりながら発展したことを示していた。グローバルな思想と地域や国家権力の結びつきは、グローバルヒストリーの叙述において非常に重要なテーマとなるだろう。

午後は、共有された知識と科学と題したセッション2にて、まずカーン氏が20世紀における人類の起源の研究が、帝国主義、ナチズムの台頭、第二次世界大戦といった世界情勢の影響を受けてきたことについて論じた。国民国家のために書かれた歴史においてナショナルアイデンティティが強調されてきたことをうけて、近年では世界に住む人々が共有することのできるグローバルなアイデンティティが必要との見方もあるが、人類の起源の研究ネットワークの実態からその難しさも浮き彫りになった。

続いて、ジョン・ラスキン（1819～1900）の近代建築思想について考察する江本氏は、翻訳言語や地域の違いによって生じた差異にも目を配りながら、ジョン・ラスキンの思想の世界的な受容についての実態を検証する方法を示した。討論では、研究に必要な言語やデジタルアーカイブスの利用方法についてなど、研究の手法について議論が交わされた。

この日最後の発表者である福原氏の論文は、中国東北部の黒龍江省における20世紀のコメの生産量増加に関する考察であった。コメの生産量を予測するための技術的側面や気象条件の分析といった農業の研究手法を歴史の叙述に応用するという試みが提案された。フロアからは、コメの生産に政治経済的要因が及ぼす影響や、人為的影響についての質問も挙がった。

セッション2を通して、一口に歴史に関わる研究といっても、自然科学、建築、農業、それぞれの分野で求められる常識や研究手法が異なるため、互いの対話を成立させるためには、創意工夫が必要だという印象を受けた。

サマースクール初日のスタート時点で、到着して間もない参加者がそろって自己紹介を行ったことや、専門の異なる参加者一人一人が「グローバルヒストリー」という枠組みの中でコミュニケーションを図る努力をしたことは、有意義だったと言えるだろう。サマースクール全体を振り返ると、後半はとてもリラックスした雰囲気の中で、研究者が専門分野を越えて対話することが可能になったと思う。（文責：寺田 悠紀）

【2日目】GHCサマースクール二日目は、Fabian Steininger氏（Berlin）、Sarah Abel氏（EHESS）、KIM Jiyeon氏（東京）らの構想について議論を行った。全体の題目は”Nation and Identity 1”とされ、歴史研究における国家的・民族的枠組みを問いなおす（あるいは、問いなおす議論を誘発する）研究が

集められた。モデレーターは Andreas Eckert 教授 (Humboldt Universitat zu Berlin)。連日の激しい雨を外に見つつ、それを笑い飛ばす活気にみちたディスカッションが展開された。

本サマースクール全体にみられる空気の明るさは、報告者がこれまで日本で経験した学問的ディスカッションのなかではなかなか見られないものだった。そこには「しかつめらしさ」がない。この明るさ、快活さ、忌憚のなさは、国外の学海の気風が流れこんだという以上に、次代の歴史学の方法を模索するという、GHC参加者共通のクリエイティブな問題意識によって、一層強まっているようにも感じられる。

一人目の Fabian Steininger 氏は、”The Nation Forms. A Study of Conceptual Change in the Late Ottoman Empire” の研究題目のもとに、文書史料をはじめ、音楽などの表現芸術、社会活動等の調査を通じて、末期オットマン朝の「国家」概念の変容を辿る。ディスカッションでは、史料収集の範囲や方法、また、氏の提唱する「感情の歴史」の展開方法を巡って盛んな意見交換が行われた。このセッションの最後には、「このサマースクールは意欲的な研究に枠組みができるヒントになればよい」という点が改めて確認された。

氏の提唱する「意味のネットワーク」(semantic net) の概念は、報告者自身の研究がとらえる「受容史」(reception history) の概念と近い、意味の創出・変容にかかわる歴史のプロセスである。互いの具体的研究領域は全く異なりながら、方法論に対する意識やアイデアには確かな近親性がある。そのようなことがあり得ることを肌身に感じたことは、ある種の心理的連帯(communion)を感じさせるものとして個人的な収穫でありながら、それを超えて、新しい世界史のための「共有可能な」地盤の可能性を暗示するものでもあった。

続く Sarah Abel 氏の研究題目は”Assessing the Social Limits of Genetic Identities: A Study of DNA ‘Ancestry’ Testing Practices in the US and Brazil”であった。本研究は、広範なインタビューにより、DNA解析による祖先鑑定がアメリカ・ブラジル社会に及ぼしている影響を辿る社会科学研究である。ディスカッションでは、本研究が社会科学と自然科学の接点となりうる点などが指摘された。また、多様な人種的バックグラウンドをもつ研究者が会する本サマースクールにとって、このセッションは各参加者のアイデンティティを見直す場ともなり、そうした点にも話題が集中した。

Kim Jiyeon 氏は “Overseas/ Foreign Travel Experience and Korea’s Globalism in 1980’s” の題目で、バックパッカー旅行と東圏学生研修(Bloc trip)の二つのケーススタディに基づき、1980年代以降の韓国における国外旅行の性質を問う。議論では、およそ同時期におけるバックパッカー旅行の世界的流行のなか、韓国の例はどのように位置づくのかわ、対象年代の定めかたなどについての意見交換がなされた。

後半の話題はさらに、「国際化とは何か」という全般的な問題に及んだ。韓国のボードゲーム「ブルー・マール」に示されるように、国際化とは、世界の地理的な縮小や、価値基準の共有・平準化のみを意味するものなのか。「地球人」を志向するこれからのグローバル・ヒストリー研究にとって、地球規模のマクロな視野による現象の把握と、(従来型の)ミクロな地域史研究との関係を正しく捉えることは、研究者自身が自らの既成概念を超えていかなければならないという点でも、具体的に新たな史学の方法を開発するという点でも、きわめて重要なことであるように思う。(文責：江本弘)

【3日目】サマースクール3日目は午前・午後にそれぞれ1つずつセッションが立てられた。午前のセッション4はセッション3に続いて“Nation and Identity 2”と題し、モデレータは Silvia Sebastiani 教授(社会科学高等研究院)であった。

Karina Kriegesmann 氏(ベルリン自由大学)による博士論文計画“Dangerous Fears: Brazilian Media and the Emotionalization of the Public, 1917-1930”は、当該時期にブラジルで刊行されていた新聞紙上の「独禍(German peril)」論、すなわちドイツ系移民の脅威論の分析を中心とする研究計画であった。「独禍論」の影響を測定するにあたっての新聞史料の限界、新聞から明らかにされる感情(emotion)は誰のものか、peril という語が示す意味が時を追って変容していった可能性など、研究をすすめる上で留意すべき点が指摘された。また、政治家等の反応・影響を考慮するための他史料の発見と利用、社会学における「モラル・パニック」概念の導入、共産主義や社会主義のヨーロッパからラテンアメリカへの伝播という時代背景の考慮など、多くの提案があった。

続いて、Gabriela Goldin Marcovich 氏(社会科学高等研究院)による博士論文計画“A Collective Biography of New Spain’s *Lettered City* in the 18th Century. Some Reflections on the Use of Scale Variations in a Transnational Context”は、18世紀の新スペイン(New Spain)、すなわちスペイン領アメリカにおける知識人群像とその社会の様相を明らかにしようとするものであった。「トランスナショナル」「トランスア トランティック」が明確に意識されていた本研究であるが、これをどのようにグローバル・ヒストリー研究として位置づけるかについて多くの発言がなされた。具体的には、前代に世界中に駐在したイエズス会士とメキシコ史の関係、グローバル・オリエンタリズムという視角の可能性、太平洋の向こうにある中国との相互関係など、考慮すべき点の提案があった。また、本研究にとどまらないより一般的な問題提起として、グローバル・インテレクチュアル・ヒストリーは「インテリ(Brahmanic) グローバル・ヒストリー」でよいのか、社会の他の部分をどう取り扱うのかとの発言は、「グローバル・ヒストリー」概念とどう切り結ぶか、自身の研究姿勢・視角、あるいは限界を自ら定義する必要を意識させる点で、他の参加者にも示唆的であったように思われる。

最後に寺田悠紀氏(東京大学)の博士論文計画“Global History through the Medium of Museums: The Establishment and Evolution of Museums in Iran”は、イランのミュージアム、すなわち博物館および美術館を事例として、ミュージアムというメディアから見たグローバル・ヒストリーの構想を語るも

のであった。明確にグローバル性を意識した研究計画に対し、先の Goldin 氏の報告に際してとは異なる角度から、研究の視角についての質問が多く寄せられた。具体的には、20 世紀初めから現代までを取り扱うなかで時代区分をいかに行うか、特に重視する変化はどれか、個性ある複数のミュージアムのどれを中心的に取り扱うのかなど、視野を広くもったうえで当面の叙述の焦点をどこに置くかが問題となった。さらに、「ミュージアム」、「ナショナル・ミュージアム」「近代・現代アート」など術語の問題、ミュージアムがもつ保存と展示という 2 つの機能とその時代的変遷、日本人としてイランのミュージアムを対象に研究を行うことの意味、すなわち研究者のポジショナリティの問題など、議論は多岐にわたった。

午後のセッション 5 は“Eurasia and East Asia”と題され、Janet Chen 准教授（プリンストン大学）が司会を務めた。

Lkhagvasuren Mandkhai 氏（東京大学）の博士論文計画“Reexamination of Mongol Administration: The Case of Bitigchis”は、地域社会に対するモンゴルの影響を探る一つのケース・スタディとして、モンゴル（イルハン朝）期イランの地方官吏であったビチグチに注目し、モンゴル行政のあり方の見直しを目指すものであった。史料の問題、具体的な対象時期・人物の絞り込みといった、実証研究として完成させる上で必要なステップについての質問のほか、いかなる文脈において本研究がグローバル・ヒストリーに位置づけられうるか、「モンゴル」「国家」「官僚制」といった術語の意味について、また、それらの吟味の必要性などが議論された。

Cheng Yongchao 氏（名古屋大学）の“Role and Contribution of Joseon Embassies to Tokugawa Japan and Imperial China”は、これまでの多くの研究で別個に扱われてきた朝鮮王朝の明・清および徳川幕府に対する使節（燕行使、通信使）の人員の共通性に注目し、彼らが果たした役割を分析しようとするものであった。発言はどちらかといえば研究の具体面についてのものが多く、個々の人員の教育的背景や使節に参加した動機についての質問のほか、キャリアの視点から人員の使節参加時の年齢および二種の使節における身分を分析すること、あるいは「知識の生産・交換」という視点から使節をしてみることなどの提言がなされた。

セッション 4・5 のみならずサマースクール全体を通じて、報告に対する質問・提言は、グローバル・ヒストリー研究としての位置づけについてのものと、一次史料に依拠する実証的歴史研究としての（現時点での）完成度についてのものに二分されていた。そのこと自体は本サマースクールの趣旨に鑑みて至当であったといえようが、残念ながら個々の場面では、議論のおもむくまま必ずしも当該報告の足らざるところを補うような両者のバランスにはなっていなかったという印象である。教員および学生の挙手と発言が引きも切らず時間いっぱい続くことには目を瞠る思いがしたが、それだけに、いま少しだけ積極的なモデレータによる 交通整理があってもよかったのではないかと思われた。（文責：片倉鎮郎）

●「グローバルヒストリーの可能性」シンポジウム

日時： 2015年9月9日（水） 16:30～18:30

会場： 東京大学 情報学環 福武ホール

第1回 GHC サマースクール・プログラムの一環として、2015年9月9日の午後、「グローバルヒストリーの可能性」と題するシンポジウムが開催された。グローバルヒストリー共同研究コンソーシアムに参加する各研究機関から、Jeremy Adelman（アメリカ・プリンストン大学）、Alessandro Stanziani（フランス・国立社会科学高等研究院）、Andreas Eckert（ドイツ・フンボルト大学ベルリン）、Sebastian Conrad（ドイツ・ベルリン自由大学）、羽田正（日本・東京大学）の5名の研究者がシンポジウムに登壇した。

シンポジウムではまず、羽田教授から「グローバルヒストリー共同研究プロジェクト」についての紹介と、英語での「world history」と「global history」の違い、そして日本語の「グローバルヒストリー」と「新しい世界史」といった関連する用語の相違点が説明された。次に、この「global history」という新しい分野について各講演者がアメリカ、フランス、ドイツなどそれぞれが研究拠点にしている各国における展開の近況を報告した。また、現在、世界が直面している移民、気候変動、歴史教育の問題や、国際的な学術界において英語が公用語として定着しつつある現状が、今日のグローバルヒストリーへの関心の高まりの背景として述べられた。

その後、グローバルヒストリー研究の意義について議論がおこなわれた。そこでは、これまでの歴史研究において基本的な枠組み・前提となってきた一国史研究、地域研究、また中心主義的な歴史観などについて再考するために、グローバルヒストリーが挑戦的かつ有益なアプローチであることが述べられた。これは、例えば各国史が不必要であることを意味しているのでは決してなく、分析の単位・対象・地域・用語をできる限り広い文脈で捉えなおすことで、歴史研究に新たな意義をもたせることである。また、知識の生産における歴史性と政治性という課題にとりくむためには、様々な分野の専門家との対話、そして各国史研究を行っている歴史家との協働作業が不可欠であることが指摘された。

シンポジウムの終盤では、グローバルヒストリーの研究の可能性についてさらに意見交換が行われた。グローバルヒストリーという「ツール」をこれからどのように社会に活用することができるか、なぜグローバルヒストリーが必要とされているのか、そして社会において歴史や歴史家がどのような役割を期待されているかについて討論が行われた。このテーマは聴衆との公開討論においても引き継がれた。

シンポジウムに続いて東京大学山上会館にてレセプションが催された。歓迎の辞として、園田茂人教授（東京大学国際本部副本部長）は人文・社会科学分野における協同研究の意義を強調し、特に若い研究者にインスピレーションと発表の場を提供することの重要性について述べられた。東洋文化研究所の高

見澤磨所長に よって会議の成功を祝した乾杯の音頭がとられた後、GHC サマースクール参加者のみならず、多くの研究者や東京大学の関係者による対話とネットワークづくりが行われた。(文責：金知允 Jiyeon KIM)

【4日目】2015年9月10日(木) セッション6 インド洋

サマースクールはいよいよ半日が過ぎ、四日目になりました。

今日は、午後から北海道へ移動するため、午前のセッションだけが行われました。このセッションでは、フランス社会科学高等研究院のAlessandro Stanziani教授が司会を務め、フンボルト大学ベルリンのLeonard von Galenさんと東京大学の片倉鎮郎さんが、19世紀のインド洋の交易活動について、グローバル歴史の視点から、ほかの参加者たちと活発な議論を交わしました。

Galenさんの修士論文概要「“(…) *they were like kings*” *Indian Merchants in the Sultanate Zanzibar and Oman (1840-1856)*」では、アフリカにおけるインド人商人の活動と役割が論じられ、彼らが経済の面だけではなく、政治的にもアフリカ大陸に影響を与えていたことが指摘されました。この研究について、フロアからまず、基本的な質問として、対象時間の設定、交易された商品の内容と種類、当時の通用言語、史料の性格と内容などについての質問が出ました。そして、ネットワーク・貨幣・クレジットなどの要素に注目する視点の必要性が指摘されました。特定の家族あるいは一人のインド人商人の生涯を研究対象とすることの魅力について肯定的な意見がありました。ほかにも、インド人商人によるスルターン認識についてなど、フロアから活発な発言が相次ぎました。最後に、教員からも、重要な参考文献や新たな研究の視角などが提示されました。

片倉さんの博士論文計画書「Institutional Changes of Major Port Cities in the Nineteenth-Century Western Indian Ocean: Overlapping Empires and Merchant Networks」は、19世紀の西インド洋における港湾都市の政治・経済制度の変遷と、それが港湾都市間の関係にもたらした影響を解明しようとするものです。まず、多言語による史料読解の可能性と対象となる時間幅選定の理由が確認されました。そして、航海技術発展が都市の政治・経済制度の変化に与えた影響を中心に、議論が展開されました。本報告の研究の枠組みとして設定された西インド洋は、どのような意味で東インド洋と区分されるのかという枠組みの意味についても問われました。ほかに、世界史の文脈で、19世紀の西インド洋という検討の場をどのように位置づけるのかという点について、多くの参加者が関心を抱きました。使用する史料の性格と新史料発掘の可能性についても説明が求められました。

Galenさんの研究では、インド人商人に焦点をあてることによって、従来のインド洋交易研究に新しいものが見えてくる可能性を感じました。また、四つの港湾都市を起点に、お互いの関連性を究明すること

から、19世紀の世界全体のつながりを明らかにしようとする片倉さんの研究は、野心作と言えるでしょう。二人の研究は、ともに従来の「西洋」対「非西洋」の二分法を乗り越えようとするものであり、複雑な過程を丹念に読み解く実証性と、インド洋交易に注目する理論的な問題関心を合わせ持っています。二人の今後の活躍が期待されます。（文責：程永超）

【5日目】2015年9月11日（5日目）、北海道大学、セッション7及び8

GHC サマースクールの最終日は、北海道大学の守川知子先生の御支援の下、同大学にて行われた。午前のセッションは「経済と金融 (Economy and Finance)」と題し、黒田明伸東京大学教授の司会でプリンストン大学及び EHESS からの3名の博士論文について議論が行われた。テーマは、アメリカ独立戦争における貨幣とその役割、18世紀英国における銀行制度と公的債務の増加、大英帝国の秩序の一部としてのラテンアメリカ諸国の信用度に関する問題であった。密接に関連するテーマが異なる角度と立ち位置から論じられたことでセッションは特に有益なものとなった。

3つの論文計画はいずれも公的債務や信用度といったこの時代に共通のテーマの異なる側面に焦点を当てるものであり、大英帝国のように共通の枠組みをもちながら、地域によって多様な様相を呈す事象に対する検討を深める上で、グローバルヒストリーのアプローチは特に効果的であった。

「トランスナショナル (Transnational)」と題した午後のセッションでは、プリンストン大学のシェルドン・ギャロン教授の司会で、プリンストン大学及びベルリン自由大学からの2名の研究計画について議論が行われた。ディスカッションのテーマは国境を越えた人・情報の移動及びそのグローバルな解釈であった。質疑応答とディスカッションを通じて、同セッションでは、グローバルな視点を追求する上で、national または transnational な視点からの議論も考慮すべき場合があることが強調された。その上でグローバルな視点をを用いるべきか否かは、研究の性質や目的に沿って慎重に判断されるべきであること、テーマのグローバル性の如何に関わらず、national 或いは transnational なスケールでの検討は依然有効であることが論じられた。

サマースクールの閉会に先立ち、この期間中に得られた知見を改めて振り返ると共に今後再考すべき課題を総括するための時間が設けられた。ここではグローバルヒストリーの方法論に対する検討と同時に、グローバルな視点から歴史研究を行うことの意味についても更に認識を深めていく必要のあることが提起された。特に研究の「グローバル性」を求める姿勢が先行するあまり、かえって研究が特定の視野に偏ってしまうような傾向には注意が必要である。一方、本サマースクールにおいて世界各地から集う参加者が密度の濃い一週間を共に過ごすことを通じて、相互の理解を深められたことは、今後より一層グローバルな視野から歴史研究を進めていく上で大きな収穫であったといえるだろう。（文責：Mandkhai Lkhagvasuren）

【6日目】9月12日（土）エクスカージョン

この日は、朝、札幌市内を出発し、北海道博物館、北海道開拓の村、さらにアイヌ民族博物館を見学したのちに、宿泊地である登別まで移動した。

北海道博物館は、北海道開拓記念館を前身とする総合博物館であり、今回見学した常設展は、先史時代を含めた北海道の歴史、アイヌを中心とする民俗文化、さらに北海道固有の動植物など自然生態などを主な内容とするものであった。「開拓」記念館を前身とはしているが、その展示内容には開拓者以外の視点から見たものも多く含まれている。

今回のサマースクール参加者の研究テーマは、植民地化、民族のアイデンティティ形成、貨幣流通などの経済史、建築史など、一言で歴史学といっても非常に多岐にわたっている。そのためか、上述の幅広い展示内容のどの箇所に特に興味を持つか、顕著な個人差が見られた。（たとえば、植民地化について研究している参加者は、北海道開拓に関する展示を特に念入りに見学する、といった傾向があった。）

北海道開拓の村は、50ヘクタールほどの敷地内に50棟以上の北海道の歴史的建造物を移築・再現した野外博物館である。役場や駅舎などの公共建造物、飲食店舗や新聞社社屋、官舎などの都市住宅、漁村や農村の民家・納屋など、多様な建造物が集まっており、それぞれ市街地群、漁村群、農村群、山村群という区画に分けて展示・公開されている。

ここでも、北海道博物館と同様、どの建造物や展示に特に興味を持つかは、参加者それぞれの関心や研究テーマに大きく依存する模様であった。2グループに分かれてガイドツアー（英語）に参加したものの、一部の参加者については、途中から自身の関心に従って個別に見学を行う、といった動きも見られた。

アイヌ民族博物館は、アイヌ文化の伝承・保存、調査・研究、教育普及などを総合的に行うための社会教育施設である。アイヌなどの北方少数民族に関する資料や文物を収蔵・展示するほか、屋外にはアイヌの伝統的な住居であるチセが復元され、アイヌの伝統集落が再現された野外博物館となっている。また、展示以外にも、アイヌの古式舞踊や楽器演奏などの公演も実施している。

参加者らは、各種の展示・公演を興味深く見学しており、少数民族の文化に対する関心がうかがえた。ある参加者が、アイヌのイオマンテという熊送り儀礼について、動物愛護の観点からやや否定的な発言をしており、現在の西洋における価値観と、アイヌの伝統文化との差異が感じられる場面もあった。（文責：福原 弘太郎）